

## 中世女性の栄光と実像

——北条政子と日野富子——

田 端 泰 子

### はじめに

中世の村落史・農民闘争史と女性史を、二本の柱と定めて研究を進めてくるなかで、層としての女性に主として注目してきたのであるが、その中には個人としての魅力にあふれる人物があり、どうしてもその人の全体像を明らかにしたいと思う人にめぐり会う。北条政子と日野富子もそうした人達である。いずれも好評、不評さまざまに評されているが、ここでは政治史、女性史の観点から、彼女らの真実の姿をとらえる努力をしてみたいと思う。

### 一 北条政子

北条政子は一代の「女丈夫」などと称され、政治的手腕が高く買われているとともに、やりすぎた女性、出しやばりすぎた女性として、批難される面もある。特に後者の見方は、近世以降の心ない男性評者のものである。政治の舞台に女性が登場することのなくなった近世の人々には、政子の活躍は好奇の目をもつてながめられたのも、当然である。しかし政子の評価は、鎌倉期の政治史、社会史の中でこそなされるべきであろう。

政子論では、渡辺保氏の『北条政子』<sup>①</sup>が、事跡をつぶさに記し、その上に立って適確な評価を与えている。政子

は「普通の女性からあまり離れてはいない。時勢の流れに押されて波瀾ある生涯を送り、それも決して幸運とばかりは言えない一生だった」。しかし政子が「積極的に時勢の流れを左右し運命を切り拓こうとした」場面が五つあり、そのどれもが「当を得た態度だった」。これを、「ありきたりの凡愚な女性には出来なかつたであろうことを、政子はなし得た」と評されるのである。

渡辺氏の政子論は、要するに、普通の女性のようなはあるが、その能力にはすぐれたものがあり、時にそれが発揮された、ということになろう。

「女丈夫」観に対して、渡辺氏の論は、あえて普通の女性として対置されたようにみえるのだが、政子の人格が表面に押し出されてくるのは、どちらかといえば頼朝死後であるのは、鎌倉期の政治の流れからみていたしかたない。そうした時期には政治家としての側面がクローズアップされるのは当然で、そこで「女丈夫」として行動するのは、政子ならずとも正当な道すじであつたのではなからうか。鎌倉期の政治史、家族史、社会史のなかで政子をとらえなおしてみようとするゆえんである。

政子が生れたのは、『吾妻鏡』に記された後年の記事<sup>③</sup>から逆算して、保元二（一一五七）年と推定され、治承元（一二七二）年、二十一歳の時、頼朝と結ばれている。当時の女性の結婚年齢からいうと、遅い方であつたのではなからうか。頼朝はこの年三十一歳であつたと推定される。

大姫は翌年か翌々年に生れたとされているが、このころの記録はない。政子にとって、流人であつた頼朝との婚姻の証として大きな意味をもつたのではなからうか。以後の頼朝と政子の、大姫への接し方の違いをみると、頼朝の対処の仕方が通り一片というよりも、よそよそしささを感じるのに対し、政子は常に大姫の心情を理解し、かばう態度をとっていることにもあらわれていると思われる。

治承四（一一八〇）年、以仁王の令旨を奉じて、頼朝は山木兼隆を討つが、石橋山に敗れ安房に逃げる。いっぽう北陸では九月、木曾義仲が挙兵、頼朝も十月には鎌倉に入り、政子と再会している。つづいて富士川の戦い、翌

年には平清盛が死去して、平氏方の凋落は歴然としてきた。

戦乱に明け暮れた一年であったが、このころの事を後年回想して、政子は「君為<sup>⑤</sup>二流人一坐<sup>⑥</sup>豆州一給之比、於レ吾雖<sup>⑦</sup>有<sup>⑧</sup>二芳契一、北条殿怖<sup>⑨</sup>二時宜一、潜被<sup>⑩</sup>レ引<sup>⑪</sup>籠之一、而猶和<sup>⑫</sup>二順君一、迷<sup>⑬</sup>二暗夜一、凌<sup>⑭</sup>二深雨一、到<sup>⑮</sup>二君之所一、亦出<sup>⑯</sup>二石橋戰場一給之時、独残<sup>⑰</sup>二留伊豆山一、不<sup>⑱</sup>レ知<sup>⑲</sup>二君存亡一、日夜消<sup>⑳</sup>レ魂、論<sup>㉑</sup>二其愁一者、如<sup>㉒</sup>二今静之心一……」と述べている。すでに契りをなしていた頼朝と政子の仲を、平氏を怖れて北条時政は快く許してはいなかった事がわかるが、政子は暗夜に迷い深雨を凌いで頼朝の居所に辿り着いたという。親の意志に反しても、自らの固い信念をくずさない、積極的な女性であったことを示している。また、伊豆山で頼朝の安否を気遣っていた政子は「日夜消<sup>㉓</sup>レ魂」す思いであったというのであり、感情豊かな女性であったことが知られる。

養和元（一一八一）年、二十五歳の時、政子は病にかかっている。『吾妻鏡』はこの時の状況を「仍當中上下群集<sup>㉔</sup>」と記しており、御家人達が心配して集まっていることからみても、政子は頼朝とともに、東国武家政権の中心にいたことをあらわしている。

寿永元（一一八二）年八月、政子は頼家を生むが、しばらくして亀の前の事を知ることとなった。亀の前とは良橋太郎入道の息女で、頼朝が伊豆にいたころから昵近奉公していたが、前年の春ごろから密通、「追日御籠甚<sup>㉕</sup>」しくなった女性である。政子をはばかりか、鎌倉を離れていたこの妾を、頼朝は小中太光家の小窪の宅に招き据えていたが、政子のお産のころ、伏見広綱の飯嶋の家に移している。政子は亀の前の事を牧の方から内々知らせられて大へん憤り、牧三郎宗親に仰せて広綱の宅を破却、恥辱を与えた。広綱は亀の前を伴ってやつのことで遁げ出し、大多和五郎義久の鎧摺の宅に到った。<sup>㉖</sup>翌々日、遊興に事寄せて義久の鎧摺の宅に立ち寄った頼朝は、宗親を召し出し供に加え、広綱から事の次第を聞いて宗親と対決させている。頼朝はあまりに立腹したためか、自ら宗親の髻を切つていうには「御台所を重んじ奉る事においては尤も神妙である。しかしその命に従うといつても、此の如き事は内々（頼朝に）告げ申すべきであり、忽ち恥辱を与えるのは甚だ奇怪である」と述べている。宗親は泣く泣

く逃亡した、とされている。<sup>⑨</sup>

この事件で、政子は牧宗親に、広綱の家を破却させており、住宅破却の権限を行使していることがわかる。住宅破却については、後の鎌倉幕府法『貞永式目』の四条に、重科の輩の田畠、在家、妻子、資財は守護所に召し渡すが、田宅、妻子、雑具は付け渡すに及ばずとあるので、重科の輩でも住宅は破却にまでは及んでいないところからみると、政子が行なわせた住宅破却は、厳罰にあたるということになる。頼朝の御家人である広綱に、このような厳罰を与える権限を、御台所政子もっていたことを示している。

政子はまた、多情な頼朝に対して、將軍家としては正室を尊重すべきだとの考えのもとに、御家人社会に家族秩序の範を示そうとしたのではなからうか。当時の婚姻は、家と家とのつながりを緊密にするものであり、そこにおける女性の役割も重いものであったとしたが、そうしたつながりのもとに成り立っている武士階級の婚姻、家族制度を背景に、政子は行動でもって正論を展開したのであろう。これに対して頼朝の態度は明確さを欠き、御台所を尊重するのは神妙だが、内々告げなかったからとして宗親の誓を切っているのである。あくまでも内密に済ませてしまおうという意図がみえ、対処の仕方私恨が勝っていると思えない。

この事件は、牧氏に恥辱を与えたことから、頼朝が鎌倉に帰ると、牧宗親の娘を後妻としていた北条時政は俄かに伊豆を進発するという行動を取り、あやや北条氏と頼朝との対立に発展しそうな気配であったが、北条義時が時政に従わなかったので、事なきを得る。龜の前は小中太光家の小窪の宅にまた還住し、彼女自身は政子の気色を恐れてはいたが、頼朝の寵愛が日を追って盛んになったという。<sup>⑩</sup>

ここにおいて政子は、広綱配流という断固たる処置を頼朝に行なわせる。「是依「御台所御憤」也」とあるように、遠江国に広綱を配流したのは頼朝であるが、政子の強固な意志によったことは疑いない。政子が広綱配流を強行させたのは、御台所としての自分を軽んずる者は、御家人として許し難かったからであらう。政子のとらえる將軍家とは、御家人との主従関係の頂点に立つ將軍は、頼朝一人によって担われているのではなく、次將軍たる頼家とそ

の生母である政子との、家族関係によって構成される將軍家であつたのではなからうか。したがって、この家族秩序を破る者に対して、將軍家の臣下である御家人を使つて、断固たる処置をとつた、と考えられないであらうか。しかし政子が亀の前その人に危害を加えることのなかつたのは、あくまで政子の行動が、御家人社会の頂点に立つ將軍家の家族秩序を守り、御家人に範を示すことを意図したものであつたからではないかと思う。この事件を政子の嫉妬によるものとする見方は、亀の前自身を害していないことから、当を得たものではないと思われる。

政子には、頼家について文治元（一一八五）年に次女乙姫が誕生したらしい。頼朝はこの間に、新田義重の息女で、頼朝の兄・悪源太義平の後室であつた女性に、伏見広綱をもつて艶書を送つたりしている。したがつて伏見広綱は亀の前事件だけでなく、頼朝の艶聞の使者として他にも使われていたのであり、政子の怒りを買つたのも当然であつた。新田義重の娘は頼朝の艶書を受け入れず、父義重も俄かに娘を帥六郎に嫁させてしまふという方策をとつた。義重とその娘の行動は、鎌倉武士としては思慮深い処置だつたといえよう。

元暦元（一一八四）年四月、志水冠者義高を誅殺することを頼朝は決心、配下の者をつかわしたが、女房等が窺い聞き、大姫に告げたので、志水冠者は女房の姿を借り、大姫の女房にまわりを囲まれて堀内を出ている。志水冠者は木曾義仲の子息で頼朝の婢（大姫の夫）であつたが、義仲は勅勘を蒙り、すでに戮せられていた。「その子としてその意趣尤も度し難き」により、頼朝は志水冠者を誅すべき事を思い立つたという。『吾妻鏡』のこの表現をみる限りでは、志水冠者は頼朝の故なき不安によつて誅せられることになつたことがわかる。義高を逃がしたことがわかれると、頼朝は大いに怒り、志水冠者の身代りになつた海野幸氏を召し禁じ、堀藤次親家以下の軍兵を道路に分け遣し、ついに入間河原で討ち果している。この事は「密儀」とされていたが、大姫が漏れ聞き、彼女は愁歎の余り漿水を断つた。『吾妻鏡』はこれに対して「可レ謂「理運」」と述べて、同情的な見方をしている。政子も大姫の心中を察し、悲しみが深かつた。

ところで、その後六月になつて、志水冠者を討つた本人である堀藤次入道が梟首きやうしゆされている。それは「御台所

御憤」によつてであるとされるように、志水冠者の死後大姫は病床に伏し、日を追つて憔悴したので、政子は「たとい頼朝の仰せであつても、どうして子細を姫君方に伝えなかつたのか」と大いに憤った。そのため頼朝は遁れ難く、ついに斬罪に処した、というのである。

この事件も、非は全く頼朝にあるにもかかわらず、堀藤次親家が斬罪に処せられたのは、氣の毒であるが、政子が、どうして事件の起る前に子細を伝えなかつたかとの点に、処罰の理由を置いているのは、龜の前事件の際に頼朝が宗親にどうして内々知らせなかつたのかとしたのを、逆手に取つたものであらう。斬罪は頼朝が命じたものの、龜の前事件につづいて、この志水冠者の殺害でも、頼朝側の論理がくずれ、政子の意が通つているのは、政子の見方の方が理になつていたからであると思ふのである。聾を、理由も定かでない不安にかられて殺害した頼朝の目には、義仲の息であることが肥大化して写つたのであらうが、政子の目には、政敵の子であるより、まず大姫の聾として志水冠者を見ていたのであり、姻族のつながりを大事にする、鎌倉期女性の普遍的な健康な目が開かれていたといえよう。

本曾義仲の妹・宮菊を、頼朝、政子は猶子としていた。この女性が在京している間に、その威を借りて不知行の所々を姫君に寄付し、その使節と称して権門莊公を押妨する輩が出てきたので、関東では「物狂女房」などとうわさがたち、これらの輩の監吹を止めるよう命が下され、宮菊も関東に来るようにと諫められている。鎌倉へ来た宮菊に対し、政子は「殊愍給」とあるように、よくかばつたようである。「指雑念」なき女性として、頼朝にも許され、信濃国遠山莊内一村をもらつたりしたが、猶子としていたこと、鎌倉滞在中の政子の態度、いづれからも、志水冠者のような不幸な目に遇わないよう、政子が一族の子女をよく保護している状況がみてとれる。

文治二（一一八六）年四月、頼朝と政子は鶴岡八幡宮に参り、当時京から鎌倉に来て、義経の行方について尋問を受けていた静の舞を見ることになった。これも政子が「その芸を見ないのは無念」であると、静が固辞するのをたつて勧めたことによる。この時静はへ吉野山 峰の白雪踏み分けて 入りにし人の跡ぞ恋しき へ 静や静し

つのをたまきくり返し 昔を今になすよしもかな と歌い、観衆の「上下」に「皆催興感」という感動を与えている。しかし頼朝は「八幡宮宝前において芸を施すの時、尤も関東万歳を祝ぐべきの処」、これをはばからず、反逆の義経を慕って別の歌を歌うのは奇怪だと、不快の意をあらわした。しかしこれに反論したのは政子であり、先述のように頼朝のもとに到った自分の姿を回想し、今の静の心に同じだとしたのである。そして、義経の多年の好を忘れ、恋い慕わないようなものは貞女ではない、またその心情は幽玄というべきだと、賞讃している。

ここで政子は、静の夫に恋慕する姿をみて、「貞女」と述べているのであり、自分の過去の姿とも合せて、困難な状況の中でもめげず夫を慕う女性を、「貞女」と表現したものと思われる。「貞女」という言葉が鎌倉期から使われているのも興味深い、その意味するところが、再婚しないという点にあるではなく、困難の中での夫への思慕に重点が置かれているのは、鎌倉期の貞女観の方が、より人間的であるといえる。

静は男子を生むが、「今は襁褓の内に在るといへども、争か将来を怖畏せざるや、未熟の時命を断つ条、宜しかるべき由治定」されたため、使者の手に渡され由比浦に捨てられてしまった。この件も政子は愁歎し、「宥申さるといへども叶わず」とある。恐らくは幕府で衆議によつて決定されたためにくつがえされなかつたのであろう。静とその母・磯禪尼が帰洛する際に、静に同情、多くの重宝を与えたのも、政子と大姫であつた。

政子は静をも、宮菊と同様、親族として庇護するとともに、変転する時代の中で真情を貫いてきた静に、同情以上の共感を覚えていたのではなからうか。また、夫と引き裂かれる境遇に置かれた大姫をかばうのと同じ目で、静をもみていたのであろう。

政子は、宮菊、静のみならず、元久二（一二〇五）年の畠山合戦のさい、重忠殺害の陰謀をめぐらし、ついには誅された稲毛重成の孫娘で、時政の外孫にあたる女子を猶子としたり、頼家の死後その姫君を実朝夫人の猶子とするなど、政治の過程で、本人の意志とは無関係に、不幸な境遇に落とされた女性たちを、よく保護している。頼家の遺児・善哉（公暁）を実朝の猶子としたのも、政子であつた。

建仁三（一二〇三）年五月、義経の兄で、時政の娘・阿波局を妻としていた阿野全成が、將軍頼家に謀叛を企てたとして生け虜られた時、阿波局（政子の妹）を尋問するので差し出すようにと、政子に連絡が入った。当時阿波局も「殿内」に宮仕えをしていたのである。しかし政子は、「然るが如き事、女性に知らしむべからざる歟、……全成、去二月ごろ駿州<sup>（駿河）</sup>に下向の後、音信を通ぜず、更に疑うところなし」として取り合わず、阿波局を出さなかった。謀叛という大罪の疑いをかけられた全成の妻であっても、女性には無関係として否定し去る断固とした態度をもっていたことがわかる。

縁坐を否定したこの態度は、静に対する態度などと一貫するものであり、源平争乱から執権政治確立までの政治の変転の中で、ともすればその流れに引き込まれようとする女性達を、政子は一貫してかばい続けていることがわかる。男性が政局に巻き込まれたとしても、妻であり妹であったからといって、行動を共にするとは限らないのである。それよりも女性には本来夫とは別の一個の人格であり、したがって縁坐を適用すべきではない、と考えていたのではないかと思われる。このように不幸な境遇の女性達のめんどろをよく見ている政子に対して、母性が欠けるとの評価は当を得ないと思われ、それ以上に、政子の女性観が、女性を個として尊重するものであったといえると思う。ただし、政子が女性の政治への参加を否定していたのではないことは、後の彼女の行跡がそれを示してくれる。

政子にこのようなやさしさ、女性個人の尊重、をみる半面、彼女には東国女性としての気丈さ、質素さもみうけられる。例えば建久四（一一九三）年五月、頼朝、頼家は富士の裾野で巻狩を催し、頼家がはじめて鹿を射た。當時頼家は十一歳であったと推定される。頼朝は大いに喜び、梶原景高を鎌倉に遣したが、鎌倉の政子は敢て喜びもせず、御使は面目を失って帰ったという。政子は「武將の嫡嗣として原野の鹿・鳥を獲る、強<sup>（けう）</sup>ち希有とするにたらず、楚忽の専使、頗るその煩いあるか」と述べている。武將の嫡子が狩で獲物をとるぐらいは当たり前、わざわざ使を出すなど、人々をわずらわし無駄な費えというものである、と考えたわけである。男性ばかりでなく、女性も武



勇をもってならした者の多かったこの時代（巴御前、坂額御前などの例がある）、東国の武士の母親としては当然の意見であつたろう。政子に豪放な面のあつた事が知られる。さらにいえば、頼朝が將軍家に、御家人とは異なる特別の意味づけをしようとしたのに対し、政子は東国御家人の一員、ただか統率者としての將軍家であると考えていたという、將軍家に対するとらえ方の相違があつたのかもしれない。

正治元（一一九九）年正月廿六日、頼家は征夷大將軍となつた。<sup>③</sup>それはこの年正月十三日、頼朝が死去したことによる。しかし四月十二日、頼家は、諸訴論を直接聴断することを停止させられ、今後大小の事は御家人十三人の談合により成敗することとなつた。<sup>④</sup>わずか三ヶ月で、頼家の親裁権は否定され、訴訟の裁決は合議制によつて成されることとなつたのである。十三人とは、北条時政、義時、大江広元、大夫属入道三善善信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、藤九郎入道安達盛長、足立遠元、梶原景時、二階堂行政である。中原親能は在京中であつた。有力御家人の合議制に切り換えられた背景には、いくつかの原因が考えられる。第一には、頼家は当時十七歳であり、將軍の器としては経験不足といえること、第二に將軍になつて以来、後藤基清に罪科ありとして讃岐守護職を解任、<sup>⑤</sup>佐々木盛綱の知行地を没収するなど、<sup>⑥</sup>有力御家人・功臣に対して、その功を無視するような施策をとっていることである。そのため頼朝御家人として名をあげてきた有力御家人層の反発をうけるようになったと思われる。合議制の成立に対して頼家は比企、中野、小笠原などの側近を用い、これら五人の側近の徒類が鎌倉で狼藉を働いても、甲乙人は敵対してはならない、違犯した者は罪科に処すという命を出し、五人の外は御前に参昇してはならないとして、合議制に対決する姿勢をあらわにしている。この命をみても、側近の押妨をゆるすなど、頼家は良質の政治家とはいえず、その恣意を有力御家人に制限されるのは、当然であるといえよう。

合議制を確立したのは政子であるとの見方もあるが、『吾妻鏡』のこの日の記事の主語は、有力御家人であつた<sup>⑦</sup>と考える。但し、政子が暗黙のうちに了承していたであろうことは推測できる。

ところがこれに追い打ちをかけるような事件が続いておこる。安達景盛は京都から妾女を招き下していたが、使

節として三河国に進発させられた。その留守中に頼家は景盛の妾女を召して小笠原弥太郎の宅にすえ置き、寵愛するという事件がおこった。<sup>④</sup>この女性はその後北向御所（石壺）におかれ、例の五人以外は当所に参るべからずとされる。景盛との間が險悪になることは目に見えている。そして五人の側近以下の軍士が、景盛を誅すべしとして集められている。<sup>⑤</sup>この時尼御台所政子は安達盛長宅に渡御、頼家に使を出し、「幕下薨御之後幾程を歴す、姫君又早世、悲歎一に非ざる處、今關戰を好まる、これ乱世の源也、……事問わず誅戮を加えられなば、定めて後悔を招かしたもつか、若し猶追討さるべく者、我先ず其箭に中るべし」と諭したので、頼家は洩々ながら軍兵発向を止めた。ついで政子は盛長入道の宅に逗留しながら、景盛を召して「昨日は計議を加え、一旦羽林の張行を止むといえども、我已に老耄也、後昆之宿意を抑え難し。汝野心を存ぜざるの由、起請文を羽林に献ずべし」と述べている。そして景盛の起請文を頼家に与え、昨日景盛を誅せんとしたのは「楚忽の至り、不義甚しき也」と決めたのである。「凡そ當時の形勢を見奉るに、敢て海内の守りを用い難し、政道に倦みて民愁を知らず、倡樓に娛しみて人誦を顧みざるの故也」と頼家の政治を批判、「又召仕うところ、更に賢哲の輩に非ず、多く邪佞之属たり」と側近達をも非難している。

政子がこのように盛長宅に出向き、頼家を諫め、争乱を未然に防いだ功績は大きい。頼家への訓戒は、政子が頼家の実母として、親権をかけて行ったものといえよう。頼家には、事の状を尋問もししないで誅戮しようとしたり、御家人の妻女を取上げるといふ、御家人の統率者としての基本的能力に欠けるところがあつたといえよう。それに反して、政子は安達盛長宅に自ら入り、景盛の起請文を取り付け、いっぽう頼家を厳しく諫めるという、機敏で正確な行動をとっており、その訓戒にも、為政者としての常識が溢れている。

頼家はその後も、正治二（一二〇〇）年十二月、五百町以上であれば恩地を削り無足の近臣に与えようとして宿老の憤慨をかって止めさせられたり、深夜にいたるまで毎日のように蹴鞠にふけて北条泰時に内々批判されたりしてゐる。<sup>⑥</sup>これらの事にもあらわれているように、頼家には將軍家としての才能に欠けるところがあつたと思われる。

建仁三（一二〇三）年、障子越しに比企氏の謀叛を聞き、北条時政に知らせ、追討の軍兵を差し向けたのは、政子であった。<sup>④</sup>頼家の専権が止められ、十三人の合議制に変えられて以来、時に政子は將軍の役割も果たしたのである。しかし、政子を出すぎた女性と見るのも誤りであろう。熊野参詣のため西下し、京都にあった時、従三位に叙せられ、後鳥羽上皇に召されたが、「辺鄙の老尼、竜顔二尺尺するも、その益なし、然るべからず」と述べ、辞退している。従三位に叙せられたのは、卿の局・藤原兼子の斡旋による。<sup>⑤</sup>高い位に叙されながら、上皇との対面を辞退し、即時鎌倉に下向している点に、東国女性としてのひかえめだが断固とした政子の人柄があらわれている。

この従三位叙位について『吾妻鏡』は、「出家人叙位の事、道鏡之外無之、女叙位は、准后においてはこの例あり」としており、出家した女性の叙位はきわめて珍しいことであった。同年十月には、政子は従二位にまで昇進した。<sup>⑥</sup>この年、実朝も次々に昇進、正月に権大納言に任じられたのを皮切りに、兼左近衛大将、内大臣、右大臣と異例の昇進であった。これらは、上皇の「実朝」命名、坊門信清の娘との婚姻とともに上皇と実朝すなわち公武のトップレベルでの友好の一端を示すものと捉えられている。<sup>⑦</sup>

政子と兼子について慈円は「女人入眼ノ日本国、イヨイヨマコトナリケリト云ベキニヤ」と述べているが、この言葉を皮肉ととるか、真意ととるかは別としても、女性の政治家として政子が当時不動の地歩を占めていたことが知られる。そしてその政子の政治方針とは、有力御家人によって頼家親裁を止めて合議制が確立された方向につながっており、少なくともそれは政子の承認のもとに行なわれたであろうことは、前述の通りである。以後、侍所別当として頼朝の独裁を助けていた梶原景時が、そして頼家の妻の父・比企氏が滅ばされているのも、將軍をわがものにしての独裁政治は御家人層の望むところではなく、合議制とその発展としての執権政治が、御家人層の求めるところであったことを示している。執権政治は確立の初期に「故將軍家御時拝領の地は、大罪を犯さざれば召放つべからず」という、御家人所領保護の基本施策を打ち出すのである。そして恣意に基づく政治ではなく、法・大法に基づく政治を指向していく。

政子が正式に政治をとったのは、実朝の死後、摂家將軍頼經の時代である。

承久元（一二一九）年正月、実朝が公暁によつて殺害され、しばらく將軍不在の時期があつたが、その間に阿野時元の謀叛が起つた。鎮庄のため出兵の命を下したのは政子である。七月、頼經が下向したが、当時二歳であり（建保六年生れ）「若君幼稚の間、二品禪尼是非を簾中に聴断すべし」とあり、裁決は政子が行なっていることがわかる。

承久三（一二二一）年五月、承久の変が勃発、政子は家人達を集めて演説する。当時、政治を聴断する立場にあつたのは政子であり、東國の盟主でもあつたのであるから、政子が御家人に対して演説するのは当然である。「皆心を一にしてうけたまわるべし、これ最期の詞也。故右大將軍朝敵を征罰し、關東を草創して以降、官位といひ俸祿といひ、其恩すでに山岳より高く、溟渤より深し。報謝之志浅からんや。しかるに今逆臣の讒によつて非義の綸旨を下さる。名を惜しむ族、早く秀康・胤義等を討取り、三代將軍の遺跡を全うすべし。但し院中に參らんと欲する者は、只今申し切るべし。」

頼朝以来の恩顧を説き、非義の綸旨に加担しようとする者の自由も認めるといふ、まことに心憎いばかりに見事な演説である。並居る御家人達の志氣を鼓舞するには、これ以上のものはなかつたろう。群参の士は悉く命に応じた、とされている。

承久の変後、政子は八月七日、三千余カ所の没収地を勇敢勲功の浅深に随ひ、面々に充行つてゐる。執行したのは右京兆（義時）であり、自分は少しも得るところがなかつたとして、美談として残るこの事件も、政子の命によつて行なわれている。また貞応二（一二二三）年正月、庶民の喜憂を知るため、去年の合戦以後に新補された守護地頭の所務に非違があれば注申せよと、畿内西國の在庁に命じてゐる。

義時を協力者としながら、時の為政者として多忙な活動の日を送る一方、政子は老齡の自分の後継者として、また頼經を補佐して幕府の建設を続ける中心人物として、泰時を選んでゐた。元仁元（一二二四）年六月、義時が死

去したあと、泰時・時頼を將軍の後見として武家の事を執行させることとした<sup>64</sup>。また、不穏な動きをみせる伊賀光宗や三浦義村に対し、女房駿河局一人を供として義村宅に行き、奥州（義時）なきあと、その跡を継ぎ、関東の棟梁となるべき者は泰時である、最近北条政村と伊賀光宗の兄弟がしきりに義村宅に出入りしているが、政村を扶持して濫世の企を図るのか、和平の計を廻らすのかどちらをとるのかと詰問、反逆をとどめるとの言質を取り付けて帰っている<sup>65</sup>。このようにして三浦氏の動きは封じたが、伊賀光宗の動きは押えることができず、その鎮圧・事後処理も政子の最後の仕事となった。閏七月一日、若君と政子は泰時亭に移り、使を義村のもとにやって招き寄せ、壹岐入道、出羽守、小山判官、結城左衛門尉以下の宿老も召して、「上幼稚の間、下謀逆禁じ難し……各盡し故將軍記念の儀を存ずる哉、然らば命に随い一揆の思いを成すにおいては、何者か蜂起あらんや」と、宿老中の一致協力を呼びかけている。義時後室伊賀局と光宗は流刑となり、光宗の所領五十二カ所は叔父行西に預けられた<sup>66</sup>。一族への預け置き処置も、政子の命を請うて、泰時が下知するという形をとっている。

嘉祿元（一二二五）年、五月ごろから病に伏していた政子は、祈禱のかいなく七月十一日六十九歳で薨じた。「前漢の呂后天下を執らしめ給う、若しくは又神功皇后の再生か」と『吾妻鏡』に述べられているように、当時、為政者としての手腕が大いに評価されていたことがわかる。

政子が実朝なき後、幕府の中心に居たのは、將軍家が欠けていたり、將軍となるべき人が年少であったからであり、頼経は政子が死亡した時八歳で、死後ようやく元服しているのである。「尼將軍」として、將軍の任務を果たわけてあるが、それには、政子が二位という高い位にあったことも、御家人の統率者としてふさわしい条件であったと思われる。

頼家が將軍となつて以後、御家人社会の動揺は続いていたが、ことに尼將軍として執政した時期は、鎌倉幕府創立以来最大の危機（承久の変）を迎えた時期であった。困難な時期にあつて、政子は十三人合議制、有力御家人Ⅱ宿老の合議制、執権政治を推し進めつつ、將軍家としての責務を果たしたのであった。そしてまた武家の棟梁と

しての素質を備える泰時を養成したのである。武家政治の基礎を確立するのに、政子は大きな役割を果たしたといえよう。

政子はどこまでも北条氏一族の中の人物であったような評価も受けているが、政子自身頼家の娘を実朝夫人の猶子とするなど、一族の子女を広く扶持しており、政治上においても宿老中の結束による幕府の危機の乗り切りを基本姿勢としており、後を託す人物として北条氏の中に泰時を見付けたということではなからうか。執行は義時や執権、宿老の合議等に任せつつ、將軍家としての役割を、後半生見事に果たしてきたといえよう。

#### 注

- ① 吉川弘文館。
- ② 同書一七九—一八〇頁。
- ③ 嘉祿元（一二二五）年、六九歳で死去している（『吾妻鏡』同年七月十一日条）。
- ④ 渡辺氏前揚書。
- ⑤ 『吾妻鏡』文治二年四月八日条。以下『吾妻鏡』引用部分は、年月日のみ記す。
- ⑥ 養和元年十二月七日条。
- ⑦ 寿永元年六月一日条。
- ⑧ 同年十一月十日条。
- ⑨ 同年十一月十二日条。
- ⑩ 拙稿「鎌倉期における母子関係と母性観—家父長制家族の成立をめぐる—」（『母性を問う』上所収）。
- ⑪ 同年十一月十四日条。
- ⑫ 同年十二月十日条。

- ⑬ 同年十二月十六日条。
- ⑭ 乙姫（三幡）は正治元（一一九九）年六月三十日死去しており、『吾妻鏡』には「御年十四」とあり、文治元（一一八五）年生れと考えられる。
- ⑮ 寿永元年七月十四日条。
- ⑯ 同日条。
- ⑰ 元暦元年四月二十一日条。
- ⑱ 同年四月二十一、二十六日条。
- ⑲ 同年四月二十六日条。
- ⑳ 同年六月二十七日条。
- ㉑ 文治元年三月三日条。
- ㉒ 同年五月一日条。
- ㉓ 同日条。
- ㉔ 文治二年四月八日条。
- ㉕ 同日条。
- ㉖ 同日条。
- ㉗ 「貞女二夫にまみえず」ではない点に注目したい。
- ㉘ 文治二年七月二十九日条。
- ㉙ 同年九月十六日条。
- ㉚ 元久二年六月二十三日、十一月三日条。
- ㉛ 建保四年三月五日条。

- ③② 建永元年十月二十日条。
- ③③ 建仁三年五月二十日条。
- ③④ 建久四年五月二十二日条。
- ③⑤ 正治元年二月四日条。
- ③⑥ 同年四月十二日条。
- ③⑦ 同年三月五日条。
- ③⑧ 同年三月二十二日条。
- ③⑨ 同年四月二十日条。
- ④① 同年七月二十六日、二十日条。
- ④② 同年八月十九日条。
- ④③ 同日条。
- ④④ 同年八月二十日条。
- ④⑤ 同日条。
- ④⑥ 同日条。
- ④⑦ 正治二年十二月二十八日条。
- ④⑧ 建仁元年九月廿二日条。
- ④⑨ 建仁三年九月二日条。
- ⑤① 建保六年四月二十九日条。

『愚管抄』

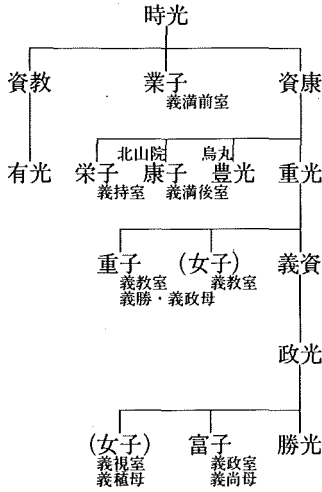


- ⑤2 建保六年四月二十九日条。
- ⑤3 同年十月二十六日条。
- ⑤4 同年正月二十一日、三月十六日条など。
- ⑤5 上横手雅敬「鎌倉幕府と公家政権」(新『岩波講座日本歴史5』中世1所収)。
- ⑤6 『愚管抄』
- ⑤7 建永元年正月二十七日条。
- ⑤8 承久元年正月二十七日条。
- ⑤9 同年二月十五日、十九日条。
- ⑥0 同年七月十九日条。
- ⑥1 承久三年五月十九日条。
- ⑥2 同年八月七日条。
- ⑥3 貞応二年正月二十三日条。
- ⑥4 元仁元年六月二十八日条。
- ⑥5 同年七月十七日条。
- ⑥6 同年閏七月一日条。
- ⑥7 同年七月三日、二十九日条。
- ⑥8 嘉祿元年七月十一日条。

## 二 日野 富子

日野富子は永享十二（一四四〇）年、日野政光の娘として生れた。兄は勝光、妹ものち將軍義視の室となり義種を生んでいる。富子自身、義政室であり、義尚の母であるが、將軍家が日野氏から正室を迎えるようになったのは、左の系図にもみられるように、義満の代からである。義満が公家である日野氏から業子、ついで康子という二人の正室を得たことの背景には、武家である義満が公武両勢力を押えて超越的な地位に立とうとする方針があったと考えられる。義満は南北朝の合一を成したあと、有力守護を制圧、武家の頂点に立つとともに、京都周辺に地盤をもつ公家・寺社に対しては、所領安堵権を掌握、日明貿易を主催するなどによって配下に収め、自ら「日本国王」と称して武家・公家・寺社勢力の上に立つことを明示している。このような將軍義満の正室が、公家から迎えられたことは、義満の専制権力確立のために、一つの手段として必要であったといえよう。

《日野家略系図》



義政は永享八（一四三六）年の生れであり、父義教は六歳の時、赤松満祐に殺されている。嘉吉の変である。義

教の次の將軍には、義政の兄・義勝がなったが、嘉吉三（一四四三）年、十歳で病没する。多くの弟があつたにもかかわらず、後嗣に義政が決まつたのは、義勝・義政共に日野重子の子であつたこと、および日野氏の当時の存在形態と大いに関係があつたと思われる。

義教は日野重光のもう一人の娘を正室とし、重子を側室としていたと推定されるが、永享三（一四三一）年、正親町三条家出身の側室尹子を正室にあげている。これについて河合正治氏は「義教が日野家出の前室を個人的にきらつたというよりも、日野氏が外戚として権勢を振うのを牽制するのがねらいであつた」とみておられる。日野義資は義教の不興を買い、籠居させられ、ついには暗殺されてしまう。義資の父・重光の所領も没収されている。永享八（一四三六）年、伝奏をつとめた日野兼郷も、出仕停止・所領没収の憂き目に遇う。このように義教時代は日野氏の受難・没落時代であつた。こうした時に、義教が没し、義勝が早世したことは、日野家復活の機会をもたらしただことになる。

嘉吉三（一四四三）年、義政が義勝の継嗣に決つた時、彼は八歳であり、十四歳になつた宝徳元（一四四九）年に元服、將軍となつている。義政の時代は嘉吉の乱と嘉吉徳政一揆にはじまる農民闘争の高揚と、下剋上の嵐をともにうけた時代であつた。

日野富子が義政に嫁したのは、康正元（一四五五）年八月、十六歳の時であつた。義政は二十歳である。<sup>⑤</sup>

長祿二（一四五八）年十二月、義政は室町殿（花の御所）の再建を決め、取りかかった。<sup>⑥</sup>ところが長祿三年から寛正元（一四六〇）年にかけて、天候不順による大飢饉が京都を襲い、寛正二年京都の餓死者は八万二千人に及んだとされる。<sup>⑦</sup>こうした状況のもとでの造営工事続行であつたため、義政の行為が後花園天皇によって厳しく諷刺されるのも当然であつた。

残民争ヒ採ル首陽ノ薇

処々閉レシ炉ヲ鎖ニ竹扉ヲ

諸興吟ハ酸ナリ 春二月

満城ノ紅緑為レ誰ガ肥 ユル<sup>⑧</sup>

飢餓の中で辛くも生き残った人民は蕨を採って飢えをしのいでおり、家々は炬を閉じて竹の扉を閉している、と吟じている。義政も後花園天皇からこれほどまでに言われると、恥じ入り、造営工事を中止した。<sup>⑨</sup>

長祿三年、富子は男児を出産したが、すぐに死亡。この事件は義政の乳母で側室でもある今参局の調伏によるとの讒言があり、義政はついに局を追放することになる。<sup>⑩</sup> 今参局は大館家の娘で、義政に老宗の臣とされた大館持房の従姉妹である。彼女は義政の側近くにあつて政治に口入した。「室町殿視候の女房御今参と号す、この五六ヶ年天下万事、併びにこの身上にあるの由謳歌せしむの間、權勢を振り傍若無人なり」といわれている。また、『臥雲日件録』に「このころの政治はおそらくこの三魔から出ている。それは御今、有馬、烏丸である」と三人の肖像画とともに落書されていた、とあるように、今参の局は筆頭にあげられており、その政治への容喙のほどが知られる。

今参局をはじめ、義政を通じて自分の意見に基づき尾張国守護代を更迭したことから、重子や彼女に同調する守護大名らとの間に対立が生じ、<sup>⑪</sup> 富子が正室となつてからは富子との間に反目が生じた。先述のように、富子の生んだ男子死亡も今参の呪詛だと讒言され、ついに琵琶湖の中に浮ぶ沖島に配流される途中、切腹したとされている。<sup>⑫</sup>

日野富子が政治に口をさしはさむようになったのは、彼女以前に今参局や重子があり、彼女らとの対立あるいは支援の渦巻く場に投げ出されたという状況からみれば、必然的な方向であつたと思われる。富子の口入の前提として、重子、今参局らの政治への容喙が、すでに日常化し恒常化していたのである。

寛正五（一四六四）年四月、義政と富子は揃つて<sup>ただ</sup>糺河原の勸進猿樂を見物している。<sup>⑬</sup> 音阿弥をはじめとする観世座の三日間の興行は、鞍馬寺塔婆修造費にあてるためとの名目であつたが、大名、公家から一般庶民に至るまで大勢が見物し、猿樂がすむと夫妻は細川勝元邸や斯波義廉邸で饗応を受けている。同年十一月、義政は弟の義視を養子としており、<sup>⑭</sup> 寛正六年には花頂山・若王子、大原野の花見の宴も行つており、<sup>⑮</sup> 猿樂見物をはじめとして、いず

れも華美を極めたものであった。このころは義政、富子の仲も良く、將軍家の權威がまだまだ健在であることを印象づけた時期であったと思われる。

寛正六（一四六五）年十一月、義視は元服するが、その三日後、富子は男子義尚を生む。①②当時義視は細川勝元の後楯を得ていたので、富子は山名宗全を頼っている。文明五（一四七三）年には伊勢貞親、山名宗全、細川勝元が相ついで没し、義尚は九歳で元服、將軍となる。義尚を擁立しようとしていたのは、伊勢貞親と富子の兄・日野勝光であったが、貞親の死後に將軍となった義尚は、実質的には勝光の思うままであった。しかし勝光も文明八年に没し、その後は富子が義尚を表面に立てて政治の舞台に登場することになる。

有力武將が相ついで没し、乱中にも厭戦気分が強くなった文明六（一四七四）年ごろ、義政は酒におぼれ、政治に熱意を失っており、諸將も犬笠懸にふけり、①③表面上は大乱中であることを忘れたかの如くであったが、それは全く頽廢以外の何物でもなかった。義尚はまだ若輩で、諸行事に参加する程度にしか動きはみられず、義視は義政・義尚と対立する立場にあったことから、乱がはじまってから、伊勢や美濃に下向しており、幕府を動かす立場にあったのは、富子だけであったのである。「天下公事修は女中御計」①④とあるのは、御台所富子以外に政治を行う者がなかったからである。このころ、何かの政策を実施しようとしても、現地では受人られるような状態ではなかった。たとえば丹後国は一色氏に返付されたが、武田、細川右馬頭の内者が、切り取っていた所領を渡すはずもないので、「一色迷惑是非なし」②と記される結果に終わっている。

「公武上下昼夜大酒」という頽廢は文明九年の『大乘院寺社雜事記』にも記されている。「明日出仕之一衣も酒手に下行」「奉公方の者共は、当年中に無為の儀之なくば、各々逐電すべき支度」③をしている。戦乱の続くなかで、支配階級は頽廢し、方向を見失っていた。経済が逼迫したのは、家屋敷や財宝、所領を失った公家ばかりでなく、市中の市民から大名までそうであったのである。したがって、文明六年ごろから政治の中心にあり、また経済に明るい富子に富が集中した感があるのは当然であろう。「御台一天御計之間、新足共其数を知らず御所持」④とあ

り、富子が政道の中心にあったために、必然的に富が為政者に集中してきた状況を知ることができる。「一天下之新足ハ此御方ニ有之様ニ見畢<sup>⑤</sup>」といわれる程、富子は唯一の資産家であった。それを富子はどのように利用していたのであろうか。一つには陣中の大名・小名に利息を取って錢を貸し付けており、畠山左衛門佐義統も一千貫を借用している。<sup>⑥</sup>二つには、米倉を設けて米商売を行う準備をしていることから、こうした商売の資金に使われたと考えられる。<sup>⑦</sup>三つには、文明八（一四七六）年三月、要脚一万疋を禁裏番衆に遣していること<sup>⑧</sup>にみられるように、国家支出として使用していることが知られる。「公武上下昼夜大酒」の頹廢<sup>⑨</sup>ぶりと比較すれば、錢・米を運用し、国家支出を肩替りしている富子の行為は、健康的なあり方ではなからうか。

富子の利殖における有能さは、兄・勝光にもちがったかたちでみられた。文明六年閏五月五日、畠山義就の進退の事について、二千百貫文の礼錢をもって日野内府（勝光）が斡旋したといわれているが、<sup>⑩</sup>これは東軍と和解するための工作であった。巨額の礼錢を取る賄賂政治の典型であるが、富子の場合<sup>⑪</sup>は高利貸でも米商売でも、商いとしてなされているのであり、相違点は大きい。勝光の死後その邸には和漢の重宝が山のように集められていたという。<sup>⑫</sup>以上述べてきたように、文明六年ごろからの富子の執政は、富子が他者を押しのけて裁決権を握ったというのではなく、為政者であるべき義政、義尚、義規が、政治に対する熱意を失っていたり、若年であったり、対立したりしており、そのような状況が御台としての富子を為政者の立場に押し上げることになったものと考えられる。

乱後の文明十二年九月十一日、幕府は内裏修理のためという名目で、京の七口に関所を設けた。しかし莫大な関錢も「修理においては有名無実<sup>⑬</sup>」であり、実際には幕府というより御台所<sup>⑭</sup>富子の物になった。「上下甲乙人迷惑珍事<sup>⑮</sup>関也」といわれる悪評高い関所であった。この関所設置に反対して土一揆が蜂起し、京都―奈良間の通路は不通となった。これより先、徳政を申し立てる在所がいくつかあったが、富子から方々の領主に仰せ付けられ、各在所を成敗したため、一たんは静かになる、という事もあった。<sup>⑯</sup>富子は近年よく「公物」をもって高利貸を行ない、利錢をとっている。<sup>⑰</sup>そのため徳政騒動に対してはこのように厳密の沙汰に及んだのである。このように、富子が公

用物をもって利殖にあて、公用物として取り立てている様子を知らることができる。とすると関銭徴収も、それを「公物」として軍用するための資金として、一貫した利殖の道に組み込まれていると考えられる。

応仁の乱後、富子はこのように公用物の運用を利殖の道の中で追求し、そのため関銭公用徴収に反対する土民と対立、きびしく追求する立場に立ったのである。土民と富子とは、その後も関所設置のシーソーゲームを演じており、文明十三年正月の場合、土民が関所を破ると、すぐに富子が七口関をまた立てようとし、しかし土民が破るべき支度をしているというので、ついに立てることができなかったという。<sup>③</sup>

政治上では、乱が終結して以後は、文明十年から義政が寺領や公家領を安堵したり、課役免除を行なっており、再び義政が執政することとなる。いっぽう義尚も、文明十一（一四七九）年に十五歳の成人となり、判始め、評定始め、沙汰始めを行ない、<sup>④</sup>奉公衆もまわりに集まり、新しい権力として登場した。したがって、乱後は富子が政治に登場する道は自然に閉ざされたといえる。しかし「公用」の運用は、富子が国家財政の一部を担っていることからも、任されていたと考えられるのである。

文明十二年、一条兼良は『小夜のねざめ』と『樵談治要』の二書を著わしている。『小夜のねざめ』は、兼良の隨筆で、富子に与えた教訓書であり、教養の必要性を述べ、政道論では「ことにや大かた此日本国は和国とて女のおさめ侍るべき国なり」と、女人政治が例外的なことではなく、日本では伝統あるものであったことを強調している。また天照大神・神功皇后・北条政子の例をあげ、政子の政道を道理にかなったものと肯定、「今もまことにかしこからん人のあらんハ、世をもまつりごち給ふべき事也」としているから、兼良は女性でも才能がある者なら、為政者として適格であると考えていたことがわかる。河合氏はこれを「暗に富子の『女人政治』に歴史的意義付けを行なおうとしている」とみておられるが、先に述べたように、富子が政治上為政者の立場に登場したのは文明六年から文明九年ごろまでで、それも周囲の將軍家に意欲なく、自然に押し上げられるかたちで天下の公事を執行したと考えられるから、兼良のこの表現は、兼良の女人政治観であるとみた方がよいのではなからうか。

いっぽう『樵談治要』は若い義尚の諮問に答えて政治の要点を述べた教訓書であり、七条に「簾中より政務をこなはるる事」がある。貴人の妻がすだれの中から政務をとったことがあることを述べたもので、女人でも天下の道理に明らかならば、政道を補佐することはできると肯定したものである。「補佐」である点に、当時の富子の位置がよく示されているのではなからうか。政治を補佐する彼割を担って執政した富子は、経済面ではあまりにも積極的な「補佐」ぶりを発揮したのである。

延徳元（一四八九）年三月、義尚は鉤の陣で没する。<sup>③</sup>二十五歳であつた。富子は義尚死後、追善料所の寄進を義政に促し、柩を護つて京都に還り、等持院に安置している。この時富子は輿の中で声も惜しまず慟哭している。<sup>⑤</sup>茶毘に付すのを主催したのも富子であり、そのため用脚十万疋を寄進した。<sup>④</sup>四月二日、集證が富子を弔問すると、「四歳にして父（日野政光）に離れ、それより以後、此の如き悲しい事はなかつた。茫然とするばかりである」といったとされている。<sup>①</sup>

義尚（源）の次の將軍に、義視と富子の妹との間に生れた義材（義植）を推したのも富子であつた。<sup>②</sup>時を得た義視、義材父子は四月に入京し、義視の娘の入っている通玄寺に居を定めている。<sup>③</sup>

しかし義政が再び政治を執ろうとし、<sup>④</sup>義材を推す富子はあわてゐるが、義政は翌延徳二年一月、五十五歳で没している。<sup>⑤</sup>義政の供養も又富子が行なわねばならなかつた。富子は義政の初七日に薙髪するとともに、料所梅津莊西院南莊を長福寺に寄進、義政・義尚の冥福を祈っている。<sup>⑥</sup>富子は一位の尼となつた。

義材と共に入京し、時めいていた義視であつたが、富子との間は前々の如く陰悪であり、富子の所領を没収し、富子の住んでいた小川第を毀たせるなどの行為があり、<sup>⑦</sup>細川政元も義材に反対であつた。延徳三（一四九二）年義視も没すると、<sup>⑧</sup>義材と政元の対立は鋭くなり、政元は足利義遐（義高・義澄）を擁して義材にそむく。<sup>⑨</sup>義遐は堀越公方足利政知の子であり、このころ富子は政元と手を組み、義遐を猶子としている。義材は越中に出奔した。そして管領細川政元、將軍足利義高が、明応三年十二月に実現することになる。<sup>⑩</sup>



このように義尚、義政、義視、義材、義高の間で將軍職をめぐる争いがたえず、めまぐるしく動く激動の時期を、富子は四十八歳から五十六歳の分別盛りを過している。氣丈に義尚、義政の葬儀を行い、死後の將軍職決定に奔走してはいるが、応仁の乱前よりの義視との対立は消え去るべくもなく、また管領細川政元の力も文明ごろから陰然と存在し、困難をきわめた時代であつた。この時期、富子は將軍家の継嗣のみには、努力を傾けていることがわかる。また継嗣に關与する權限も、尼御台所として、持っていたと考えられる。

明応五年五月二十日、富子は没した。五十七歳であつた。『親長卿記』には、富子の遺骸はすぐには荼毘に付されず、二十日間も室内に安置されていたとある。また將軍義高は葬禮にもおまらず、「大珍万宝」<sup>⑤</sup>といわれた多くの遺産は未処分のままであつた。富子も義尚、義政と同じく等持院に葬られ、遺骨は高野山に分納されている。<sup>⑥</sup>

以上述べてきたことから、日野富子の置かれた立場をまとめると、以下の如くなる。第一に政治への口入についてであるが、これは日野重子や今参局等の政治に対する關与が当然となつていた時期に、義政との婚姻や男児の出世をみたことに由来すると考えられる。義満の代から続いてきた日野氏の將軍家との婚姻關係も、時の將軍の性格によつて強く左右され、義教時代日野氏は不遇であり、その挽回のためにも、富子にかけられた期待は大きかつたと思われる。したがつて、女性の政治への關与の前例と、日野家の期待をうけた彼女が、政治に口入していくのは自然であつたと思われる。

第二に、文明六年から九年ごろまでの為政者としての立場、文明十二年ごろまで続くそれを利用しての利殖活動については、義政の政治的熱意の欠亡、義尚がまだ元服以前の少年であり、政治を担当するには未熟であつたという將軍家の条件のなかで、富子は為政者の立場に押し上げられたと考えられる。また特に経済には明るいという聡明さを、彼女自身もつていたと考えられる。

第三に、こうした利殖を是とする風潮が、室町期の社会にあつたことが、富子の経済活動を支えていたと思われるのである。拝金主義であると富子を評価してはならないと考える。金持ちが「有徳人」と称され、利殖を行う能

力が評価されたことは、『御伽草子』にもみえるところである。そうした風潮の中では、富子の利殖も、当時の人々にはあながち非難されるばかりではなかったのではなからうか。禁裏御番衆への賜金だけでなく、天皇家や公家・寺社は富子の献金の恩恵に浴していた。国家財政が破綻している乱中、乱後の社会で、富子の財がその一部を肩代りしたといえるであろう。

注

- ① 『建内記』、『満濟准后日記』。
- ② 『看聞御記』
- ③ 『足利義政』（清水書院）。
- ④ 以上『看聞御記』、『満濟准后日記』など。
- ⑤ 『康富記』『尊卑分脈』
- ⑥ 『在盛卿記』
- ⑦ 『碧山日録』、『大乘院寺社雜事記』など。
- ⑧ 『長祿寛正記』
- ⑨ 同右。
- ⑩ 『碧山日録』、『経覚私要抄』
- ⑪ 『経覚私要抄』
- ⑫ 『康富記』
- ⑬ 三浦周行氏『日本史の研究』。
- ⑭ 『蔭涼軒日録』、『長祿寛正記』

- ⑮ 同右。
- ⑯ 『親元日記』、『蔭涼軒日録』
- ⑰ 『親元日記』、『親基日記』
- ⑱ 『公卿補任』
- ⑲ 『大乘院寺社雜事記』 文明六年閏五月十五日条。
- ⑳ 『史料綜覧』
- ㉑ 『大乘院寺社雜事記』 文明六年閏五月十五日条。
- ㉒ 同閏五月五日条。
- ㉓ 同九年七月二十九日条。
- ㉔ 同右。
- ㉕ 同右。
- ㉖ 同右。
- ㉗ 同右。
- ㉘ 『実降公記』
- ㉙ 『大乘院寺社雜事記』 同日条。
- ㉚ 『長興宿禰記』
- ㉛ 『大乘院寺社雜事記』 文明十二年九月十六日条。
- ㉜ 同右。
- ㉝ 同右。
- ㉞ 『大乘院寺社雜事記』 文明十三年正月七日、十一日条。

③⑤ 文明十年二月二十二日には島津氏に書を下し、遣明船を扶持させているのをはじめとして、三月十五日には東福寺、南禅寺等の寺領を安堵、以後さかんに寺領安堵状を出す。また十一年五月十八日には、吉田兼永に、平野社領の領有を認め、役夫工米以下の諸公事課役を免除している。

③⑥ 『長興宿禰記』

③⑦ 河合氏前掲書。

③⑧ 『公卿補任』、『親長卿記』など。

③⑨ 『久守記』

④⑩ 『蔭涼軒日録』

④⑪ 同右。

④⑫ 『大乘院寺社雜事記』同年四月八日条。

④⑬ 『宣胤卿記』

④⑭ 『蔭涼軒日録』

④⑮ 『御湯殿上日記』、『親長卿記』など。

④⑯ 『御湯殿上日記』、『蔭涼軒日録』。

④⑰ 『蔭涼軒日録』。

④⑱ 『蔭涼軒日録』など。

④⑲ 『大乘院寺社雜事記』明応二年三月二十一日条。『御湯殿上日記』など。

⑤⑩ 『公卿補任』。

⑤⑪ 『大乘院寺社雜事記』同年五月三十日条。

⑤⑫ 『親長卿記』など。

おわりに

北条政子が政治を執ったのは、正確に言えば実朝の死後、頼朝の時代であるというのが、本稿での主張点の一つである。頼朝なきあと、頼家の時代から、北条政子が將軍の代りをつとめたとする見方もあるが、口入をしたとしてもそれは將軍の親としてであり、親権に基づく臨時的な措置であつたと思われる。また政子は親族・姻族の中の不幸な境遇にある子女をよく保護しており、識見高く、しかも東国の女性らしい豪放で断固とした面もあわせていたといえる。特に幕府創草期最大の政治的危機を乗り切つた政子の識見と手腕は、“尼將軍”として大いに評価されて当然であるといえよう。

いっぽう日野富子は、女性が政治に関与する前例の著しい時代に成長し、その渦の中に投げ込まれたのであるが、政治を執つたと思われる期間は、意外に短い。応仁・文明の乱中の四年間程にすぎないのである。文明十二年の關所設置のころには、義政が政治を執っているので、富子は經濟面で関与できただけである。しかも富子の財は、高利貸や米商売に運用されただけでなく、財政の破綻していたこのころの幕府や將軍家の財政を支える部分にも使用されている。あながちに富子の利殖は非難ばかりすべきものではないだろう。

武士階級の勃興期にあつて、政子の地位と能力が必要とされた時代に生れた北条政子と、室町將軍家の權威が、社会のさまざまな要因によつて、地に落ちつつあつた時代に、政治上の空白期間を埋める立場に立たされた日野富子とは、単純に比較することができない。その人物の能力を生かすのも殺すのも、時代の流れであつたとしか、いいようはないのである。

〔追記〕 本稿は、本学図書館研究室棟竣工記念講演会（86・4・26）での講演をもとに、改稿したものである。